

論文の内容の要旨

論文題目 セキュリティの系譜学：生と死のはざまに見る帝国日本

氏 名 金 杭

この論文は、セキュリティという概念を通して帝国日本の国家思想における系譜を辿ったものである。セキュリティは、ホブズが近代主権国家の存立根拠として打ち出したもので、個人の生命と国家存立が結んでいる根源的な関係を示す概念だと言える。ホブズによると、国家の大きさや強さは敵との比例において決定される。このことが示唆するのは、敵は国家に先立って存在しているものであり、それゆえに、このときの敵は国家の敵なのではなく個人に対する敵だということである。したがって国家が生成するのは、この絶対的に強い敵によって、暴力的に殺されるかもしれないという個人の恐怖によってだと言える。このとき個人はあらゆる防御の手立てを捨て去った素っ裸の状態にある。つまり国家は、素っ裸の個人と常に強力な敵との相関関係に付された名に他ならないのだ。セキュリティは、こうした関係を指し示す、国家存立への超越論的な問いから生まれた概念なのである。

この概念によって帝国日本を解剖するために、第1部ではまず丸山真男を論究対象とした。なぜなら、ホブズの国家思想を通して帝国日本の精神構造を批判した人物は丸山真男だからである。彼は国家の存立があらゆる関係性を逸した個人の決断にあると見なした。彼にとって民主主義とは、個人が繰り返し所与の関係性を脱ぎ捨て、そこから決断を反復する永久革命であった。その限りで国家と個人の関係はバランスを保てる。丸山のこうした国家批判は、国家が自然的に生成し存続してきたと見なしてきた帝国日本の思想構造に向けられたものだった。彼は国家に対するそうした自然主義から脱するために、個人の手によって作られたフィクションという唯名論的な原理を国家存立の基盤に据えたのである。だが彼が福沢諭吉を通して説破しようとしたこのような原理は、自己背反に陥ってしまう。というのも、丸山にとって国民たろうとする個人はあらゆる関係性から離脱せねばならないが、彼の個人はすでに日本という関係性において思念されていたからである。その限りで丸山の国家批判は、その成立の根拠を問いた

だす超越論的な試みだったのだが、彼はセキュリティという問いに至らなかった。つまり国家は、個人の決断ではなく、素っ裸になった個人の生命によって存立することを丸山は思考しえなかったのだと言える。そしてこの自己背反は、帝国日本の思想構造に対する丸山の対決が不十分なものだったことに由来し、結局その構造に丸山が屈したことを意味する。第2部と第3部では、この対決を再開させることによって、帝国日本の思想構造がいかんセキュリティの問題を回避してきたのかを論じた。

まず第2部では、大正デモクラシー・教養人格主義を代表する人物たちの国家・国体論を一瞥した。特に美濃部達吉と上杉慎吉の国体論争を通して、大正デモクラシーを象徴する美濃部の国体論がいかん国体を自然化させたのかを論証した。美濃部は国体を法学の領域から排除することによって、国体為人為的な思考を介入させる余地のない、日本人の心に根ざした根本規範だと見なした。上杉のファナティックな国体観がアカデミーやジャーナリズムの世界において疎まれたことに象徴されるように、こうした美濃部の国体観は当時のデモクラシーと教養人格主義の支配的な観念であった。それを代表するのが、阿部次郎と和辻哲郎である。彼らは美濃部と同様、国体や民族を思考や政治の領域、すなわち作為の介入できないものと規定した。こうした国体の自然化は、日本人であることを疑い得ないものとして思念することにつながったが、関東大震災における朝鮮人虐殺は、こうした自然化が成立不可能であることを露にした出来事に他ならなかった。まず戒厳令は、すべての個人を素っ裸にする法的な措置である。というのは、戒厳令によって法と生は一致し、そこに国家という関係性はその生成の場に立ち戻るからである。朝鮮人という敵は、こうした状況において個人を国家の民へと変化させるものに他ならなかった。つまり、敵の襲来に恐れおののく個々人が、国家という関係性へと己を従属させる原初の場面が、地震によって廃墟と化した東京一帯で繰り広げられたのである。ここで日本人はすでに日本人であることができなかつた。なぜなら、朝鮮人を識別するために、すべての人々は日本人たることを証明せねばならなかつたからである。日本人であることを自然的なことだと見なした大正期の支配的な言説は、ここで崩壊を余儀なくされる。何人もすでに日本人であることは不可能で、日本人であることは証明という人為的な操作を経てのみ可能だったからである。

第3部では、小林秀雄の自然主義に焦点を当て、小林秀雄が日本古来の思想伝統を継承した人物だという神話を批判し、彼の自然主義が丸山と同様、近代的な方法的意識の自己背反たることを論証した。小林秀雄の批評は、ランボーの詩とヴァレリーの方法に根本的な資源を吸い取ったものである。ランボーにおいて小林は言語の極限を見て取り、ヴァレリーにおいて批評が自己証明たることを悟ったと言えよう。そうして小林が見出した批評の原理は、「私」というコギトに他ならなかつた。この「私」は、いかなる既存の観念や慣習や関係を信じない。「私」は、徹底的な懐疑によって、「私」を証明するのみである。このとき「私」は、一つの主観でもなく、一人の主体でもない。「私」は思考と対象がそこにおいて分割される、一つの関数であるのみである。したがって「私」が懐疑を通して行き着くコギトは、思考を基礎付ける普遍的な根拠などではない。コギトは、小林にとって、自分が生きてきた絵図を繰り広げることそのものであ

る。それゆえそこには絶対的に疑い得ないコギトなどはない。繰り返し自己の歩みを広げて見せる、批評という実践があるのみである。これが小林秀雄の近代日本に対する批判の原理であった。小林は、それまでの近代日本の文学が自然主義の埒内を脱し得なかったと見なし、文学の可能性の条件として「私」という、自然的な所与のものをすべて拒否する超越論的な根拠を見出したのである。しかしこうした小林の峻厳な方法意識は、戦争に直面して潰えてしまう。それは小林が戦争によって自分の方法的原則を曲げたからではない。むしろ小林は、戦争において自らの方法が開花するモメントを見つけ出し、戦争という出来事において、「私」の実験を実行し悦楽を感じた。それはすべてが疑わしい非常時において、あらゆる意匠が取り払われることを小林が垣間見たからであった。この実験を可能にしたのが、「死」という確実性が前面に現れた戦争に他ならなかったのである。だが戦争によって「死」が確実なのは、個人があらかじめすでに国家の民だからである限りで、小林は個人が疑い得ないものとして愛国心に行き着く。日本人であることは、戦争のさなか、小林の方法が行き着いた最も確実なことだったのである。だが、植民地朝鮮における徴兵制の実施と、それを装飾した靖国の論理は、そうした小林のロジックが破綻することをみせてくれる。というのも、植民地朝鮮の人々は、懐疑を通して自分が日本人であるという確実性へと行き着いたのではなく、死を以ってしか日本人になれないという、新しい生を得るために死に赴くパラドックスを経験せねばならなかったからである。そしてこのパラドックスは、靖国の論理が体現しているとおりに、朝鮮という例外的な状況に限定されたものではなく、帝国日本が存立するための根源的なロジックである。つまり個人は死ぬ限りにおいて帝国日本の民たることができたのだ。小林の自然主義は、こうした根源的なロジックを隠蔽するものだったのである。このような議論を通して、丸山真男に代表される国家批判の系譜が、いかに超越論的な問い、つまりセキュリティという問いを回避してきたのかを論証された。